

大切な人のために流す涙は、
この世で一番あたたかい涙かもしれない

コロッケが
本名〈滝川広志〉として臨む初主演作
三世代にわたる、“見送るものたち”の誇りと絆

ゆずりは



滝川広志 柁木玲弥

原田佳奈

高林由紀子

大和田紗希

島かおり

勝部演之

原作：新谷亜貴子『ゆずりは』（銀の鈴社・刊）



平成30年胆振東部地震
被災地支援チャリティー

2019年9月30日(月) くりやまカルチャープラザ「Eki」
栗山町中央2丁目1番地 / 0123-73-3333

共催 / 栗山町老人クラブ連合会・栗山町指定管理者(株)日東総業
後援 / 栗山町・栗山町教育委員会・栗山町社会福祉協議会・栗山町ボランティア連絡協議会

コロッケが、本名〈滝川広志〉として臨む 初主演作。

「死」と向き合う現場で、命の尊さと大切な人への思いを描く
せつなくもあたたかい涙あふれる映画の誕生

STORY

水島は、葬儀社のベテラン営業部長。彼の務める会社に茶髪でピアスの若者・高梨が面接にやって来た。水島は周囲の反対を押し切って採用を決める。一見、軽薄に見える高梨だが、実は、御遺族にしっかり向き合い、自然体で心に寄り添う豊かな感受性の持ち主であった。妻を自殺で亡くした水島は、数多くの人の「死」を悲しむ心を押殺してきたが、高梨との出会いによって熱い心と妻への思いを取り戻していく。そんなある日、高梨がいじめを苦に自殺した故人に想いを寄せるあまり、参列者を罵倒するという騒ぎを起こしてしまう……。

誰もが避けて通ることの出来ない「死」を通して、命の尊さと大切な人を見送る思いを描いた、せつなくもあたたかい涙あふれる映画が誕生した。「ゆずりは」は、葬儀社に務めるベテラン社員と新入社員が、さまざまな葬儀の現場で出会う人々の悲しみや愛に触れながら、自身の迷いや葛藤と向き合っていく物語。「ゆずりは」は一年を通じて緑の葉を絶やさない常緑樹で、若葉が育つを見届けて古い葉が落ちるその様から、代々受け継がれていく命のバトンにも見立てられる。少子高齢化社会の到来で、誰もが自らの「死」とどう向き合うかを問われる現代。葬儀という「別れ」を介して出会う人々の心の交感、老若世代を超えた幅広い観客層の共感を呼ぶことであろう。

主人公のベテラン葬儀社員・水島に、日本を代表するエンターテイナー・コロッケが、本名の滝川広志として初主演。芸歴37年目の新境地をみせる。ある想いを胸に葬儀社で働く新入社員・高梨に、「ライチ☆光クラブ」(16)、の榎木玲弥。世代も考え方も違う二人がそれぞれに成長を遂げていく。原作は、葬儀をめぐる多彩な人間模様を描いた新谷亜貴子の同名小説(銀の鈴社・刊)。監督は、大ヒットドラマ「HERO」の加門幾生。脚本は、吉田順と企画演劇集団ボクラ団義で作・演出を務める久保田唱が共同で執筆。その他のキャストには、勝部演之(『金融腐蝕列島・呪縛』)、原田佳奈、高林由紀子、島かおりらが、ワークショップで見出された若手俳優たちと互いに刺激し合いながら、豊かな作品に仕上げていく。また、本作のために書き下ろされた主題歌「襟～yuzuriha～」(babycatrecords)をR&Bシンガーソングライターの森本ナムアが透明感のある歌声で花を添えている。



「死」は「生」に一番近い存在です。「死」に触れた時ほど、「生」を感じたり思い出したりすることはありません。

毎日、消える命と生まれてくる命があります。

私たちも、そんな「繰り返される生と死」の営みの一部であり、そうした無数の命がこの地球という星を支えているのです。

誰かの命が傷つけられたり、奪われたりするニュースが多い今だからこそ、そんな思いをこの小説に託しました。

原作：新谷亜貴子

ゆずりは

「ゆずりは」2018年 / 111分 / ビスタ
配給：エレファントハウス / アジアピクチャーズエンタテインメント

2019年9月30日(月)
くりやまカルチャープラザ「Eki」

開場30分前 / 自由席
13:30 ~ 15:30

一般前売
(一般当日1,500円) 1,000円
小・中・高校生 一律 500円

【チケット取扱所】
くりやまカルチャープラザ「Eki」(お問い合わせ 0123-73-3333)
角田農村環境改善センター / 南部公民館 / 栗山町社会福祉協議会
共催 / 栗山町老人クラブ連合会・栗山町指定管理者(株)日東産業
後援 / 栗山町・栗山町教育委員会・栗山町社会福祉協議会・栗山町ボランティア連絡協議会

©「ゆずりは」製作委員会